

関西学院大学 研究成果報告

2021年 5月 31日

関西学院大学 学長殿

所属：社会学部
職名：教授
氏名：三浦 耕吉郎

以下のとおり、報告いたします。

| | |
|--------|---|
| 研究制度 | <input checked="" type="checkbox"/> 特別研究期間 <input type="checkbox"/> 自由研究期間 <input type="checkbox"/> 大学共同研究 <input type="checkbox"/> 個人特別研究費 <input type="checkbox"/> 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。 |
| 研究課題 | 〈対話〉としての社会学 — 差別とケアの現場から |
| 研究実施場所 | 大学 |
| 研究期間 | 2020年 4月 1日 ～ 2021年 3月 31日 (12ヶ月) |

◆ 研究成果概要 (2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

この研究は、被差別部落でのライフヒストリー研究と、認知症の人たちのグループホームでの参与観察にもとづきながら、マイノリティの人たちの置かれている現状と課題を明らかにすることを目的としている。その際の方法論としては、現場における当事者と私たち研究者の間に生じるディスコミュニケーションに着目する〈対話〉的アプローチを用いていく。このアプローチは、現場やフィールドの外にいる研究者が保持する認識枠組みである〈科学知〉と、現場の人たちの認識枠組みである〈生活知〉との相互作用を記述するなかで、とりわけ両者のあいだのすれ違い、ズレ、乖離等に着目することによって、既存の社会理論の援用とは異なる、生活者の観点を内包した新たな社会理論の再構築、ないし創出を目指そうとするものである。

部落問題に関しては、すでに十数年にわたって調査を続けている福岡市および伊丹市におけるライフヒストリーのインタビュー調査やフィールドワークによるデータの整理および分析に取り組んだ。そのなかで得られた研究成果としては、福岡市史編纂室における専門委員として執筆した二本の研究エッセイがあげられる。一本目は、「夜に運ぶ／闇にうごめく」という論文であり、音楽一家でもある家族が、親子二代にわたって取り組んだ運送業にまつわるさまざまな逸話を中心におきながら、敗戦直後の混乱した時代から、高度成長期に至る40年にわたる世相の変化を縦

軸に、そして、真夜中から日の出前の時間帯に彼らが闇にまぎれて運んできた多様な〈モノたち〉を横軸にして、彼らの〈語りのなかの生〉を描きだしたものである。とりわけ、私たちが「運送業」が普段扱っているモノについてのイメージを大きく覆すとともに、私たちの身近なモノたちが夜の闇にまぎれながら、どのような人びとの、いかなる思いや技術的工夫に託されながら運ばれているかという点について、新鮮な驚きとともに「運送業」についての新たな知を生み出すことをめざした作品という。

また、二本目の論文は、「下町ホルモン奇譚」と題するが、長い間、忘れ去られていた日本社会における内臓食の歴史をふまえながら、戦前・戦中・戦後と、日常的にホルモン類が食卓をかざっていた下町のホルモン（臓物）文化の掘り起こしをめざした研究の成果である。下町でふと耳にした「いがき」とよばれるホルモンが、いったい、内臓のなかのどの部位が原料として用いられているのかを追跡しつつ、戦中・戦後の食糧難の時代にもホルモン類だけはつねに貴重な常食として供給されつづけていた語る人たちの、ホルモンへの愛着と屈折とか入り混じった深い思いや、当時の食卓に欠かせなかった「ホルモンのすきやき」や「ホルモン鍋」の作り方や、そして今日では手に入らない貴重部位の味覚や数々の珍味についての人びとの思い出が盛り込まれた作品となっている。以上の二作品は、『新修福岡市史 民俗編』に収録予定。

また、認知症の人たちのグループホームでの参与観察については、当初の計画では長期間にわたって敢行する予定であったが、コロナ禍のために断念せざるをえなかった。しかし、このコロナ禍のなかで、グループホームの入居者やスタッフの方々が、いったいどのような苦労や危険や差別を抱え込まなければならなかったのかについては、彼らがそれらをどのように克服したのかも含めて、今後研究しなげばならない重要な課題にはほかならない。そうした将来的な研究計画をねる一方で、これまで参与観察やインタビューで得られていたデータをもとに、論文「グループホームで父を看取る（4）——〈介護と医療のより良き連携〉のゼロ地点から」を『新社会学研究』第5号（近刊）を執筆した。この論文は、グループホームにおける看取りとは、どのような特色をもっているのか？ また、認知症の人の看取りは、どうあるべきか？ といった問いをめぐり、私の父親の事例をもとに5年間にわたって連載しているものである。今回は、当該ホームにおいて最初の老衰死（自然死）をとげた父の看取りにおける介護と医療の連携のあり方が、ホームにおける看取りのゼロ地点として如何様のものであったかを、今日、がん患者を看取るまでになったホームの現状も踏まえつつ論じている。そのなかでも、長年グループホームで培われてきた、リビングルームでの人の気配や話し声や物音から食事の匂いといった生活感に満ちた雰囲気を居室にしながらにして利用者が感じ取れるような仕組みの重要性を、このグループホームならではの看取りにみられる〈ニギヤカサ〉として概念化したこと、および、看取り期における医療と介護をつなぐ接点としての訪問看護師の独特な役割に注目したことが、本論考のオリジナリティとなっている。

さらに、以上の論文の他に、『環境社会学事典』（丸善、2022年刊行予定）に、「構造的差別と「加害－被害関係」の両義性」（中項目）を執筆した。

また、書評論文を以下の二著について執筆した。

神原文子著『子づれシングルの社会学 貧困・被差別・生きづらさ』晃洋書房、2020年、『フォーラム現代社会学』第20号、2021年所収。

早川洋行著『われわれの社会を社会学的に分析する』ミネルヴァ書房、2020年、『ソシオロジ』第201号、2021年。

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

報告用紙②

- ◆ 研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。